年間選者賞（平成二十九年七月号～三十年六月号）

黒岩剛仁選

水本光（平成二十九年九月号）

相槌を打たねど桃の下枝よりわれを見詰める二羽の雉鳩
野の草の結べる万の実を揺らし命の鼓動を風運び来る
南風（まぜ）強く不動の森の椎の木が明日の入梅告げて騒立つ
水無月の雨にけむれる里山の襞より雉の尖り声する
遅れたる摘果なさむと作業着を纏ふに畑に霧雨の降る
霧雨が降りみ降らずみ葉を濡らし帰れ休めとわれに囁く
台風の近付く夕べ桃畑に若挽ぎなさむと決めて急ぎぬ
若挽ぎをなして並べる桃の実の垂らす滴が土間に染みゆく

●作者の言葉

暁に目覚めて畑仕事に行く習慣を続けている。畑の仕事は自然相手だから、天候に左右される。それに作物は個性的で我が儘であるから、仕事の手抜きが出来ず、せっせと精を出していると、様々な虫や小動物が訪れてくる。害虫もあれば害鳥もあるが、それらの生き物や作物が私に語りかけ、作歌へと結びつけてくれる。お陰で「心の花」入会以来欠詠していないが、最近歌がなかなか出来なくなった自分に励ましの選者賞を下さった黒岩剛仁先生ありがとうございます。

●選者の言葉

昨年七月号～本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計四一人。その中で複数回選んだのは、石田郁男、佐佐木定綱、児島直美、水本光、倉石理恵、山本枝里子の六人で、もちろん、たまたま私のところに多く回って来たということもあるのだが、水本作は三度であった。この方々の作品はいずれも力作だったが、結果としては上に掲げたように、昨年九月号の水本作八首を年間選者賞とした。二月号の倉石作、四月号の山本作には最後まで頭を悩ませた。

上の水本作は、圧倒的な自然の、そして仕事の歌であり、詠まれている題材全てが生きている、と感じた次第。〈野の草の結べる万の実を揺らし命の鼓動を風運び来る〉が私の一押しである。